

SDS-14

ノイズを含む多次元非定常時系列への
新しいフィルタリング法と応用

国友直人

February 2020

Statistics & Data Science Series back numbers:
<http://www.mims.meiji.ac.jp/publications/datascience.html>

ノイズを含む多次元非定常時系列への 新しいフィルタリング法と応用

国友直人

明治大学

2020年1月

2020年1月11日「関西計量経済研究会」(一橋大学)における講演内容。

佐藤整尚氏との共同研究 Kunitomo-Sato (2019), Kunitomo-Awaya-Kurisu (2019, published), Kunitomo-Sato (2017) に基づく (基本的アイデアは高頻度データに関する研究をまとめた Kunitomo, Sato and Kurisu(2018, Springer) にある)。研究への高橋明彦氏からの示唆に感謝する。

研究の動機

マクロ経済データの例

非定常変数誤差モデル

K_n 変換と Z_n 過程

データの直交分解

フィルタリング法

実例と展望

非共積分・共積分
I(1) 時系列の推定

まとめと展望

Outline

研究の動機

マクロ経済データの例

非定常変数誤差モデル

K_n 変換と Z_n 過程

データの直交分解

フィルタリング法

実例と展望

非共和分・共和分 $I(1)$ 時系列の推定

まとめと展望

ノイズを含む多次元
非定常時系列への
新しいフィルタリ
ング法と応用

国友直人

研究の動機

マクロ経済データ
の例

非定常変数誤差モ
デル

K_n 変換と Z_n 過程

データの直交分解

フィルタリング法

実例と展望

非共和分・共和分
 $I(1)$ 時系列の推定

まとめと展望

- ▶ 多くのマクロ時系列では全く同一ではないが似たような季節性や(景気)循環変動などの共変動が観察されている。Engle-Granger(1987)では非定常系列においてVAR(vector AR)による共和分(co-integration)分析を提唱しているが、(現実的な)季節性や観測ノイズの存在は無視している。
 - ▶ Co-integrated processes は興味深いが、現実の時系列には制約的すぎないだろうか。例えば厳密に co-integrate してないと、co-integrated 状態に近い場合でも従来のかんりの議論が破綻する。(回帰係数の一致性 etc.) ここで重要なのは非定常多次元データ間の関係を損なわないフィルタリング方法が必要なこと。
- 実例

$$\mathbf{x}_t = \begin{pmatrix} x_{1,t} \\ x_{2,t} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x_{1,t-1} \\ x_{2,t-1} \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} \epsilon_{1,t} \\ \epsilon_{2,t} \end{pmatrix},$$

$$\mathbf{y}_t = \begin{pmatrix} y_{1,t} \\ y_{2,t} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x_{1,t} + \beta x_{2,t} \\ x_{2,t} \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} v_{1,t} \\ v_{2,t} \end{pmatrix}.$$

マクロ経済データの例

マクロ経済データとして重要な系列である実質 GDP と実質消費の二次元時系列、マクロ消費系列の三系列を例として議論する予定。

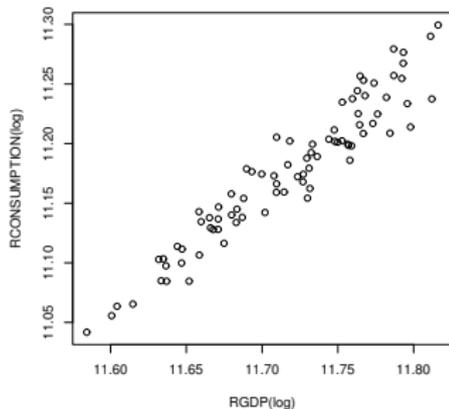


図 2.1 : 実質 GDP vs. 実質消費

ノイズを含む多次元
非定常時系列への
新しいフィルタリ
ング法と応用

国友直人

研究の動機

マクロ経済データ
の例

非定常変数誤差モ
デル

K_n 変換と Z_n 過程

データの直交分解

フィルタリング法

実例と展望

非共和分・共和分
 $I(1)$ 時系列の推定

まとめと展望

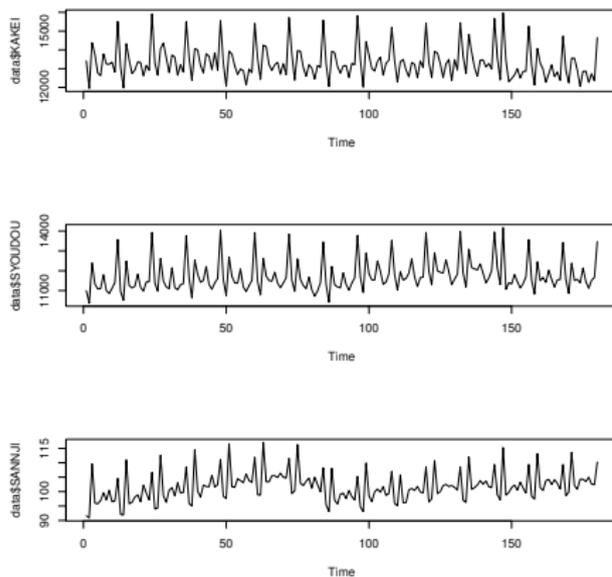


図 3.1 : マクロ消費 3 系列

季節性を含む加法モデル

$$\mathbf{y}_i = \mathbf{x}_i + \mathbf{s}_i + \mathbf{v}_i \quad (i = 1, \dots, n),$$

において正整数 s ($s > 1$), N , $n = sN$ とした季節要素を \mathbf{s}_i ($i = 1, \dots, n$) は $(1 + \mathcal{L} + \dots + \mathcal{L}^{s-1})\mathbf{s}_i = \mathbf{v}_i^{(s)}$, を満足と仮定 (Kitagawa (2010), Kunitomo and Sato (2017)),

$$\mathbf{v}_i^{(s)} = \sum_{j=0}^{\infty} \mathbf{C}_{js}^{(s)} \mathbf{e}_{i-sj}^{(s)},$$

$\mathbf{e}_i^{(s)}$ は i.i.d. 系列、 $\mathbf{E}(\mathbf{e}_i^{(s)}) = \mathbf{0}$, $\mathbf{E}(\mathbf{e}_i^{(s)} \mathbf{e}_i^{(s)'}) = \mathbf{\Sigma}_e^{(s)}$ 、係数和の絶対値収束性を仮定する。

他の定式化, 例えば $(1 - \mathcal{L})\mathbf{s}_i$ が定常過程, あるいは Box-Jenkins の定式化なども可能。

研究の動機

マクロ経済データの
例非定常変数誤差モ
デル K_n 変換と Z_n 過程

データの直交分解

フィルタリング法

実例と展望

非共和分・共和分
I(1) 時系列の推定

まとめと展望

例えば $(1 - \mathcal{L})\mathbf{s}_i$ が定常過程との定式化なら $\mathbf{f}_{\Delta s}(\mu)$ を $\Delta \mathbf{s}_i$ の $(p \times p)$ スペクトル密度行列

$$\mathbf{f}_{\Delta s}(\mu) = \frac{1}{\pi} \left(\sum_{j=0}^{\infty} \mathbf{C}_{sj}^{(s)} e^{2\pi i \mu s j} \right) \boldsymbol{\Sigma}_e^{(s)} \left(\sum_{j=0}^{\infty} \mathbf{C}_{sj}^{(s)'} e^{-2\pi i \mu s j} \right) \quad \left(-\frac{1}{2} \leq \mu \leq \frac{1}{2} \right),$$

基準化 $\mathbf{C}_0^{(s)} = \mathbf{I}_p$, $i^2 = -1$ 。階差変換 $\Delta \mathbf{y}_i (= \mathbf{y}_i - \mathbf{y}_{i-1})$ の $p \times p$ スペクトル密度行列

$$\mathbf{f}_{\Delta y}(\mu) = \mathbf{f}_{\Delta x}(\mu) + \mathbf{f}_{\Delta s}(\mu) + (1 - e^{2\pi i \mu}) f_v(\mu) (1 - e^{-2\pi i \mu}) .$$

長期分散共分散行列 $(g, h = 1, \dots, p)$ は

$$\boldsymbol{\Omega}_s = \mathbf{f}_{\Delta s}\left(\frac{1}{s}\right) (= (\omega_{gh}^{(s)})) .$$

\mathbf{K}_n 変換と \mathbf{Z}_n 過程

データ行列に対して \mathbf{K}_n -変換 (\mathbf{Y}_n より $\mathbf{Z}_n (= (\mathbf{z}'_k))$) は

$$\mathbf{Z}_n = \mathbf{K}_n (\mathbf{Y}_n - \bar{\mathbf{Y}}_0), \mathbf{K}_n = \mathbf{P}_n \mathbf{C}_n^{-1},$$

により定義。ただし

$$\mathbf{C}_n^{-1} = \begin{pmatrix} 1 & 0 & \cdots & 0 & 0 \\ -1 & 1 & 0 & \cdots & 0 \\ 0 & -1 & 1 & 0 & \cdots \\ 0 & 0 & -1 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & -1 & 1 \end{pmatrix}_{n \times n},$$

$$\mathbf{P}_n = (p_{jk}^{(n)}), p_{jk}^{(n)} = \sqrt{\frac{2}{n + \frac{1}{2}}} \cos \left[\frac{2\pi}{2n + 1} \left(k - \frac{1}{2} \right) \left(j - \frac{1}{2} \right) \right].$$

このときスペクトル分解により $\mathbf{C}_n^{-1} \mathbf{C}_n'^{-1} = \mathbf{P}_n \mathbf{D}_n \mathbf{P}_n' \mathbf{D}_n$ は
対角行列、第 (k, k) 要素は

$$d_k = 2 \left[1 - \cos \left(\pi \left(\frac{2k-1}{2n+1} \right) \right) \right] = 4 \sin^2 \left(\frac{\pi}{2} \left(\frac{2k-1}{2n+1} \right) \right) \quad (k = 1, \dots, n).$$

ノイズを含む多次元
非定常時系列への
新しいフィルタリ
ング法と応用

国友直人

研究の動機

マクロ経済データの
例

非定常変数誤差モ
デル

\mathbf{K}_n 変換と \mathbf{Z}_n 過程

データの直交分解

フィルタリング法

実例と展望

非共和分・共和分
I(1) 時系列の推定

まとめと展望

\mathbf{K}_n -変換された系列 \mathbf{Z}_n に対するフィルタリングを考える。
 $m \times n$ 選択行列 $\mathbf{J}_m = (\mathbf{I}_m, \mathbf{O})$ として $n \times p$ 行列

$$\hat{\mathbf{X}}_n = \mathbf{C}_n \mathbf{P}'_n \mathbf{J}'_m \mathbf{J}_m \mathbf{P}_n \mathbf{C}_n^{-1} (\mathbf{Y}_n - \bar{\mathbf{Y}}_0)$$

ただし

$$\mathbf{Z}_n = \mathbf{P}_n \mathbf{C}_n^{-1} (\mathbf{Y}_n - \bar{\mathbf{Y}}_0)$$

$n \times n$ 変換

$$\mathbf{Q}_n = \mathbf{P}_n \mathbf{J}'_m \mathbf{J}_m \mathbf{P}_n .$$

研究の動機

マクロ経済データの
例非定常変数誤差モ
デル \mathbf{K}_n 変換と \mathbf{Z}_n 過程

データの直交分解

フィルタリング法

実例と展望

非共和分・共和分
I(1) 時系列の推定

まとめと展望

データの直交分解

ノイズを含む多次元
非定常時系列への
新しいフィルタリ
ング法と応用

国友直人

記号 $\theta_{jk} = \frac{2\pi}{2n+1}(j - \frac{1}{2})(k - \frac{1}{2})$,

$$p_{jk}^{(n)} = \frac{1}{\sqrt{2n+1}}(e^{i\theta_{jk}} + e^{-i\theta_{jk}})$$

を利用して

$$\Delta_{\lambda} \mathbf{z}^{(n)}(\lambda_k^{(n)}) = \sum_{j=1}^n p_{jk}^{(n)} \mathbf{r}_j^{(n)}, \mathbf{r}_j^{(n)} = \mathbf{y}_j - \mathbf{y}_{j-1},$$

と表現すると、変換系列 \mathbf{Z}_n はデータのある種の実フーリエ変換 $\Delta_{\lambda} \mathbf{z}^{(n)}(\lambda_k^{(n)})$ ($k = 1, \dots, n$) はデータの周波数 $\lambda_k^{(n)}$ ($= (k - 1/2)/(2n + 1)$), におけるフーリエ変換、データ直交増分過程である。

研究の動機

マクロ経済データの例

非定常変数誤差モデル

K_n 変換と Z_n 過程

データの直交分解

フィルタリング法

実例と展望

非共和分・共和分
I(1) 時系列の推定

まとめと展望

定理 5.1

(離散時間) 確率過程 \mathbf{r}_j ($j = 1, \dots, n$) はエルゴード的定常過程、 $\Gamma(h) = \mathcal{E}(\mathbf{r}_j \mathbf{r}'_{j-h})$ は

$$\sum_{h=0}^{\infty} \|\Gamma(h)\| < \infty .$$

を満たす (有界性を)。

(i) $\Delta_{\lambda} \mathbf{z}^{(n)}(\lambda_k^{(n)}) = \sum_{j=1}^n p_{jk}^{(n)} \mathbf{r}_j^{(n)}$, $\mathbf{r}_j^{(n)}$ がエルゴード的定常過程で $\mathcal{E}[\mathbf{r}_j] = \mathbf{0}$, 対称化実スペクトル密度行列

$$\mathbf{f}_{SR}(\lambda) = \Gamma(0) + \sum_{h=1}^{\infty} \cos(2\pi h\lambda) [\Gamma(h) + \Gamma(-h)] ,$$

は正定符号、有界性を仮定。 $\lambda_k^{(n)} \rightarrow s$,
 $\lambda_{k'}^{(n)} \rightarrow t (0 < s < t < \frac{1}{2})$. $n \rightarrow \infty$ のとき

$$\begin{bmatrix} \Delta_{\lambda} \mathbf{z}^{(n)}(\lambda_k^{(n)}) \\ \Delta_{\lambda} \mathbf{z}^{(n)}(\lambda_{k'}^{(n)}) \end{bmatrix} \xrightarrow{w} N_{2p} \left[\mathbf{0}, \begin{bmatrix} \mathbf{f}_{SR}(s) & \mathbf{0} \\ \mathbf{0} & \mathbf{f}_{SR}(t) \end{bmatrix} \right] .$$

(ii) 増分過程 $\mathbf{Z}_n(t) - \mathbf{Z}_n(s) = \frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{k=[sn]}^{[tn]} \sum_{j=1}^n p_{jk}^{(n)} \mathbf{r}_j^{(n)}$
($0 < s < t < 1$). $n \rightarrow \infty$ のとき

$$\mathbf{Z}_n(t) - \mathbf{Z}_n(s) \xrightarrow{w} N_p[\mathbf{0}, F_{SR}(t) - F_{SR}(s)] ,$$

ただし $F_{SR}(t)$ は $p \times p$ (対称化実) スペクトル分布行列

$$F_{SR}(t) = \int_0^t f_{SR}(\lambda) d\lambda .$$

で与えられる。

(実) スペクトル経験分布 (行列) は

$$\mathbf{F}_{SR,n}(t) = \frac{1}{n} \sum_{k \leq [2nt]} (\Delta_t \mathbf{z}_k^{(n)}(\lambda_k^{(n)})) (\Delta_t \mathbf{z}_k^{(n)}(\lambda_k^{(n)}))' .$$

となる。

KS(2017) における SIML 推定量は

$$\mathbf{G}_m = \frac{1}{m} \sum_{k=1}^m \Delta_0 \mathbf{z}_k^{(n)}(\lambda_k) \Delta_0 \mathbf{z}_k^{(n)}(\lambda_k)' .$$

より一般には

$$\mathbf{G}_m(t) = \frac{1}{m} \sum_{k=[2nt]-\frac{m}{2}+1}^{[2nt]+\frac{m}{2}} (\Delta_t \mathbf{z}_k^{(n)}(\lambda_k^{(n)})) (\Delta_t \mathbf{z}_k^{(n)}(\lambda_k^{(n)}))' .$$

研究の動機

マクロ経済データの
例

非定常変数誤差モ
デル

K_n 変換と Z_n 過程

データの直交分解

フィルタリング法

実例と展望

非共和分・共和分
I(1) 時系列の推定

まとめと展望

定理 5.2: (離散時間) 確率過程 \mathbf{r}_j ($j = 1, \dots, n$) がエルゴード的定常過程、 $\Gamma(h) = \mathcal{E}(\mathbf{r}_j \mathbf{r}'_{j-h})$ とする (有界性を仮定)。

(i) $m_n = [n^\alpha]$ ($0 < \alpha < 1$) とおくと、任意の $t \in (0, \frac{1}{2})$ に対し $n \rightarrow \infty$ のとき

$$\mathbf{G}_m(t) \xrightarrow{P} \mathbf{f}_{SR}(t)$$

(ii) $n \rightarrow \infty$ のとき

$$\mathbf{F}_{SR,m}(t) \xrightarrow{P} \mathbf{F}_{SR}(t) .$$

研究の動機

マクロ経済データの
例非定常変数誤差モ
デル K_n 変換と Z_n 過程

データの直交分解

フィルタリング法

実例と展望

非共和分・共和分
I(1) 時系列の推定

まとめと展望

伝統的時系列論ではスペクトル分布 F を持つ定常 (離散時間) ベクトル過程 \mathbf{r}_k^* に対して右連続な直交増分 (ベクトル, 複素数値) 過程 $\mathbf{z}^*(\lambda)$ ($-1/2 \leq \lambda \leq 1/2$) が存在し、

$$\mathbf{r}_k^* = \int_{(-1/2, 1/2]} e^{i2\pi ik\nu} d\mathbf{z}^*(\nu) \quad (k = 1, \dots, n).$$

と表現されることが知られている。(Doob (1953), Hannan (1971), Brockwell and Davis (1990).)

研究の動機

マクロ経済データの
例非定常変数誤差モ
デル K_n 変換と Z_n 過程

データの直交分解

フィルタリング法

実例と展望

非共和分・共和分
I(1) 時系列の推定

まとめと展望

(今回のフィルタリング法)

ノイズを含む多次元
非定常時系列への
新しいフィルタリ
ング法と応用

国友直人

本稿における実ベクトル値をとる確率過程 (理論値)

$$\mathbf{r}_k^{(u)} = \int_{(0,1/2]} \cos(2\pi k\nu) h_u(\cos(2\pi k\nu)) d\mathbf{z}(\nu) \quad (k = 1, \dots, n)$$

$(u = x, u = s)$ に対する (離散時間) フィルタリング値は

$$\mathbf{r}_k^{(n,u)} = \int_{(0,1/2]} \cos(2\pi k\nu) h_{u,n}(\cos(2\pi k\nu)) d\mathbf{z}_n(\nu) \quad (k = 1, \dots, n)$$

$(u = x, u = s)$ と表現される ($h(\cdot)$ はカーネル関数)。

研究の動機

マクロ経済データの
例

非定常変数誤差モ
デル

K_n 変換と Z_n 過程

データの直交分解

フィルタリング法

実例と展望

非共和分・共和分
I(1) 時系列の推定

まとめと展望

- ▶ 多期間の予測誤差を最小化するような最適なカーネル選択法 $h_{u,n}(\cdot)$ を考察中
- ▶ 離散時間確率過程 $\Delta_\lambda \mathbf{z}^{(n)}(\lambda_k^{(n)})$ は右連続な直交増分 (ベクトル, 実数値) 過程 $\mathbf{z}^*(\lambda)$ ($-1/2 \leq \lambda \leq 1/2$) に弱収束する: フィルタリングの理論的誤差評価を考察中

データの直交分解

ノイズを含む多次元
非定常時系列への
新しいフィルタリ
ング法と応用

国友直人

幾つかのマクロ系列を利用して本稿で考察しているフィルタリング法の妥当性が高いことが分かった。伝統的な時系列解析では定常過程にもとづくスペクトル密度の推定に高い関心を示していたが、その方法では非定常系列では上手くいかない理由が明らかになる。また例えば Box-Jenkin 法で推奨されている季節階差法には基本的な問題がある、ことなどがここでの分析から分かる。ここでは幾つかのデータ分析の例示にとどめる。

研究の動機

マクロ経済データの例

非定常変数誤差モデル

K_n 変換と Z_n 過程

データの直交分解

フィルタリング法

実例と展望

非共和分・共和分
 $I(1)$ 時系列の推定

まとめと展望

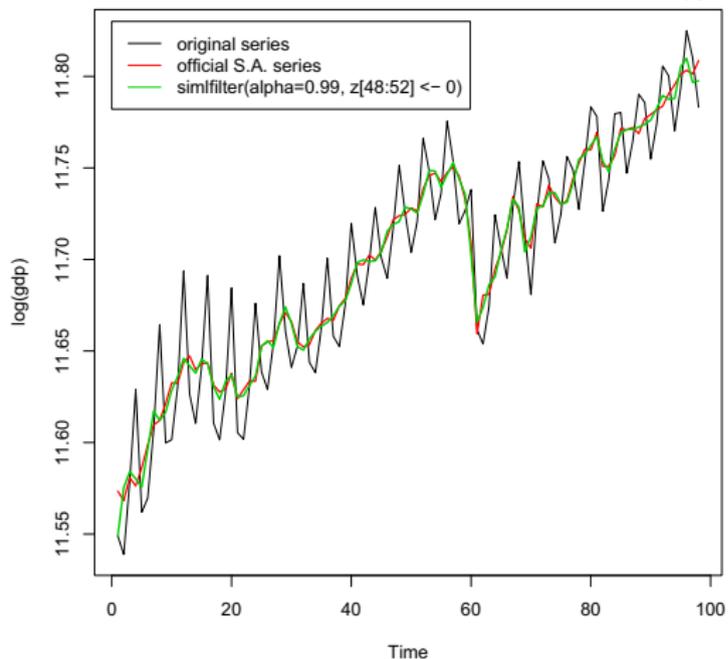


図 7.5 : 実質 GDP

References

- ▶ Akaike, H. (1973), "Information Theory and an extension of the maximum likelihood principle," 2nd International Symposium on Information Theory, B.N. Petrov and F. Csaki edited, Academiai Kiado, Budapest, 267-281.
- ▶ Anderson, T.W. (1971), *The Statistical Analysis of Time Series*, John-Wiley.
- ▶ Harvey, A. and T. Trimbur (2008), "Trend Estimation and The Hodrick-Prescott Filter," J. Japan Statistical Society, 38-1, 41-49.
- ▶ Kitagawa, G. (2010), *Introduction to Time Series Analysis*, CRC Press.
- ▶ Baxter, M. and G. King (1999) ,"Measuring Busines Cycles : Approximate Band-Path Filters for Econimc Time Series," *Review of Economics and Statistics*, 81-4, 575-593.
- ▶ Hodrick, R.J and K.J. Prescott (1997), "Postwar US Business Cycles : An Empirical Inveatigation," *Journal of Money, Credit and Banking*, 29, 1-16.
- ▶ Kunitomo, N. , Sato and D. Kurisu (2018), *Separating Information Maximum Likelihood Estimation for High Frequency Financial Data*, Springer.

ノイズを含む多次元
非定常時系列への
新しいフィルタリ
ング法と応用

国友直人

研究の動機

マクロ経済データ
の例

非定常変数誤差モ
デル

K_n 変換と Z_n 過程

データの直交分解

フィルタリング法

実例と展望

非共和分・共和分
I(1) 時系列の推定

まとめと展望

